

シャープ「液晶敗戦」の教訓

中田 行彦著



シャープの敗戦は、液晶の歴史を変えた。シャープの敗戦は、液晶の歴史を変えた。シャープの敗戦は、液晶の歴史を変えた。

シャープの敗戦は、液晶の歴史を変えた。シャープの敗戦は、液晶の歴史を変えた。シャープの敗戦は、液晶の歴史を変えた。

シャープで33年間、液晶開発などに携わり、現在は大学で教鞭をとる著者が当事者と分析者の両面からシャープの蹉跌を書いた。一言で言えば同社の失敗は投資の時機を逸したため、デジタル革命の本質と韓国・サムスン電子のしたたかさを読み切れていなかったためだという。

垂直統合という言葉象徴した「亀山モデル」が一世を風靡したのは2004年。シャープの凋落はすでに始まっていた。世界で主流になるタイプのパネル製造に最も投資していたのは実は台湾勢とサムスン。巻き返しに出ようと

当事者と分析者の両面から描く

したシャープは堺市に巨大パネル工場を追加建設するが、そこにリーマン・ショックが襲った。世界が求める液晶テレビは中国製の価格破壊型製品に変わった。

中国企業に安くパネルを供給したのはサムスンでは、との見方が本書では紹介される。それを「見方」でなく「フアクト」で深掘りできていたら相当な読み物になった。

著者は冒頭でコンピュータ革命にも触れている。そこに軸足を置いたなら、業界評論以上の内容も期待できたが、残念ながら、ページの半分程度は戦犯といわれる元経営陣の話に終始した。

とはいえシャープは再び危機にある。4、5年前の危機は何だったのか。復習したい人には役立つ本でもある。(実務教育出版・1500円)